国際芥川龍之介学会 ISAS　第 3 回研究集会印象記

堀　竜一（新潟大学）

第 3 回研究集会は、2021 年 12 月 19 日（日）午後 1 時から 5 時 20 分まで、オンライン会議システム Zoom により開催された。国や地域を越えて 50 名ほどの参加があった。

私が国際芥川龍之介学会の大会に初めて参加したのは、2013 年 11 月にドイツ・ハイデルベルクで開催された第 8 回大会においてである。大会参加中に大会報告執筆の依頼をされた。帰国後、ハイデルベルクの蕭条とした（？）風景を思い浮かべながら執筆した。そのことを思い出しながら、今回、「印象記」を執筆している。

芥川龍之介に「松江印象記」という一文がある。言うまでもなく、芥川が大正 4（1915）年 8 月に、旧制一高時代の親友であった井川恭（恒藤恭）の郷里・松江を訪れた際の随筆・紀行文である。また、岩波文庫版『芥川竜之介紀行文集』の帯には「特派員芥川がとらえた陰影に富んだ中国印象記　独自の文学ルポルタージュ」と、キャッチコピーとでもいうべき文句が記されている。

研究集会の記録は、「印象記」と題されている。「印象記」とはどのような文章を指すのであろうか。研究集会運営委員会は、上記のような芥川の文章を想定して、「印象記」と命名したのだろうか。それはともかく、今回の研究集会に参加しての、私の「印象」を記すことにしたい。

研究集会の構成は、研究発表 1 本、運営委員会企画 2 本であった。研究発表は、大阪市立大学大学院生・王青氏による「芥川龍之介「VITA SEXUALIS」と回想される幼年時代」である。草稿（あるいは未定稿というべきか）「VITA SEXUALIS」を考察対象とし（テクストの輪郭の確定はなかなか難しい）、芥川文学における性の問題に迫ろうとした。森鷗外「ヰタ・セクスアリス」の影響、「性」と子どもの社会環境といった、創作の動因を探り、さらに、回想された過去として、後年の保吉物や「少年」（保吉物の一つ）、「大導寺信輔の半生」、「追憶」、「玄鶴山房」と関連づけて考察したものである。

質疑応答では、初期の「VITA SEXUALIS」から後期・晩年の保吉物や「少年」等への飛躍・断絶、芥川の鷗外受容の変遷、子ども＝無垢観念の歴史的・社会的背景、「VITA SEXUALIS」執筆の意図、発表・発禁処分、性の文学の系譜、志賀直哉の影響、等等、さまざまな観点から議論が交わされた。質疑応答に通常の発表より多くの時間が確保されている点が研究集会の特徴（特長）である。時間をかけた質疑応答により、論が深まり、また、論の射程が大きく更新されたといえるだろう。今回、改めて「VITA SEXUALIS」、さらに、「SODOMY の発達（仮）」「性欲と云ふ事（仮）」といった初期草稿（未定稿）類を読んでみた。また、久しぶりに鷗外の「ヰタ・セクスアリス」も読み返してみた。自分の生い立ちや成長・人生の歩みを性欲的生活という観点から回想し、告白するという「ヰタ・セクスアリス」がメタフィクション的語りの構造をしていることに、思いを新たにするとともに、面白さを再発見することができた。

質疑応答の中で、室生犀星「性に眼覚める頃」、堀辰雄「燃ゆる頬」、志賀直哉「濁つた頭」

等への言及があった。私もかつて、幼年の文学について、少しばかり考えたことがある。堀辰雄「幼年時代」、福永武彦「幼年」、大岡昇平『幼年』『少年』といった作品群である。その自伝的・回想的・告白的とされる作品で、幼年期・少年期を語ることと、性・性欲・性欲的生活を語ることとは必然的に結びついていたのだろうか。性欲的生活を語ることは、回想の一側面に過ぎないのだろうか（あるいは、本質的なのか）。芥川の「VITA SEXUALIS」、とくに、「SODOMY の発達（仮）」においては、同性愛的性欲が過剰・暴露的・露悪的に描かれているが、同性愛・異性愛は、性欲的生活における発展・発達段階といってよいのだろうか。今回の発表と質疑応答を聞いて、「VITA SEXUALIS」の進化・発展・完成形（？）が、三島由紀夫の『仮面の告白』になるのだろうか、などと考えた。性欲、肉欲、同性愛、異性愛、恋愛等を関連させつつ、またそれぞれ固有の問題として考察を発展させられれば、大きな性の文学史を描くことができるのではないだろうか。

次に、運営委員会企画①「展覧会紹介」として、田端文士村記念館研究員・木口直子氏により、田端文士村記念館の特別展「芥川龍之介旧居跡地に刻まれた記憶」の紹介があった（あわせ、企画展「愛とサヨナラの物語　芥川龍之介・田端文士たちの一期一会」の紹介があった）。現在、田端の芥川家旧居跡に芥川龍之介記念館開設の準備が進められている。それに伴い、埋蔵文化財発掘調査を行ったところ、二つの防空壕が発見された。木口氏のお話は、その出土品の紹介と、そこから伺える当時の生活についてであった。特別展には「～出土品から辿る渋沢栄一との繋がり～」とのサブタイトルが付されている。配布された資料「東京都北区　田端不動坂遺跡―田端 1-20-9 地点　（仮称）芥川龍之介記念館建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告―」には、これまで見たことがなかった写真「芥川龍之介の息子たち昭和 4 年 4 月」、「戦災後の芥川家跡地（昭和 28 年・昭和 29 年）（提供：野田宇太郎文学資料館）」が掲載されていて、興味をそそられた。「耕牧舎」の牛乳瓶、「丸善」のインキ瓶、「楽天堂医院」の薬瓶、坩堝、瓦、さらには、液体目薬、乳酸菌整腸薬（今日のビオフェルミンと同じか？）、リウマチ薬、星製薬株式会社（星新一の父親が創業）の薬等の薬瓶などの出土品の紹介により（芥川家で使用していたものかどうか不明とのことだが）、下島勲や香取秀真・正彦らと龍之介・芥川家との近所づきあい・日常生活を垣間見る思いであった。

とくに興味深かったのは、「耕牧舎」の牛乳瓶である（資料には「耕牧舎」の牛乳配達表・請取證の写真が掲載されている）。昨年の NHK 大河ドラマ「晴天を衝け」は実業家・渋沢栄一の生涯を辿るものであったが、その渋沢栄一が出資者となり「耕牧舎」が成立し、龍之介の実父・新原敏三が本店と根岸や新宿の支店を所有することになったとのことである。芥川の牛乳にまつまるエピソードは幼少年期のもので、田端時代のものではないだろうが、田端の芥川家の生活にも「耕牧舎」の経営が確かに浸透していたのであろう。その手応えが感じられた（「VITA SEXUALIS」の冒頭部にも「耕牧舎」との関わりが見られる）。ごく最近（2022 年 1 月 22 日付）、『朝日新聞』「be」に、「明治期の首都は酪農王国だった」として、耕牧舎が紹介されているが、日本近代における牛乳の問題は、これはこれで非常に興味深く思われる。

最後に、運営委員会企画②「研究を聞く」として、元白百合女子大学教員・高橋博史氏に

よる「作品が開く読み—「トロッコ」に即して」の発表があった。高橋氏の考察は、できるだけ耳を澄ませて作品が語ることをそのまま聞き取ろうという姿勢に貫かれたものであった。「トロツコ」の冒頭部、良平が弟たちと工事場のトロッコに乗ったところ、土工に怒鳴られ、「それぎり良平は使の帰りに、人気のない工事場のトロツコを見ても、二度と乗つて見ようと思つた事はない。」と語り手は語る。しかし、その十日ほど後、トロッコを眼にして良平はトロッコに駈け寄ってゆく。この場面は、「トロツコ」を読み返すたびに違和感を感じてきた箇所である。高橋氏はこの箇所に着目し、二つの異なるトロッコ（トロッコ線）を浮き彫りにする。村の内部に閉ざされたトロッコと、村の外からやってきて、村の外にどこまでも続くトロッコという二つのトロッコの対照から、トロッコで遊ぶこととトロッコで仕事をすることという二つの営為の違いを意味化する。さらに、この仕事と遊びの関係は、小林多喜二「蟹工船」、志賀直哉「焚火」と響き合っていると指摘する。

高橋氏の発表を聞きながら、作品を精緻に読むことの面白さを実感させられたと同時に、作品の声・作品の内部（そして、外部）とは何か、そもそも、「作品」「作者」とは何かといった問題について、改めて考えさせられた。「トロツコ」の解釈を難しくもし、また面白くもしているのは、良平が 26 歳で東京に出て来たとして、現在の（大人の）良平の姿（境遇、心境など）が描かれ、語られていることである。質疑応答では、当然ながら、仕事と遊びの問題が議論の中心となった。二回目の良平のトロッコ体験は、「遊び」とは対立的な「仕事」として読めるのだろうか。質疑応答では、「仕事」から「労働」という方向に議論が深められた。「労働」は「仕事」と同義であろうか。二回目のトロッコ体験で良平が土工からもらった駄菓子は、労働に対する対価としての賃金と考えられるのであろうか。

質疑応答でも指摘があったとおり、「トロツコ」と同じく、湯河原出身の力石平蔵が題材を提供したとされる作品に、「百合」と「一塊の土」がある。「百合」の主人公も良平であり、「トロツコ」の続篇、あるいは連作とも読める。「或雑誌社に校正の朱筆を握つてゐる」良平は「少しの暇さへあれば、翻訳のマルクスを耽読してゐる」。そして、「薄暗いロシアを夢みてゐる」という。「一塊の土」では、働き者の嫁のお民が姑と子どもに財産を残し、腸チブスで死んでしまう。お民は「不毛の山国からこの界隈へ移住して来た所謂「渡りもの」の娘」だとされている。この「不毛の山国」とは信州であろうか、山梨あたりであろうか。もし信州だとすると、「玄鶴山房」で、玄鶴が最後に回想する「彼の両親が住んでゐた信州の或山峡の村」と響き合うのかもしれない（この回想は、王青氏の発表でも取り上げられていた）。そうなると、「玄鶴山房」の末尾において、重吉の従弟が薄汚い馬車の中でリイプクネヒト（Liebknecht の「追憶録」の英訳本）を読むという唐突な設定も、「労働」という細い糸で、「トロツコ」—「一塊の土」と（さらには、日本近代文学のさまざまな作品と）つながっていると読めるのかもしれない。